

エゼキエル書17-19章「主以外のものに頼る人」

1A 低くされた者の高慢 17

1B 別の鷲に向かう枝 1-10

2B バビロンとの契約 11-21

3B 主が植えられる若枝 22-24

2A 各自の持つべき負債 18

1B 父の酸いぶどう 1-4

2B 各世代の報い 5-18

3B 今の態度 19-32

3A 諸国に取られる哀歌 19

1B 二頭の若獅子 1-9

2B 無くなった若枝 10-14

本文

エゼキエル書 17 章を開いてください。私たちは先週の学びで、森の中のぶどうの木の喩えを学びました。それは、諸国の中にいるイスラエルの国であり、諸国のように生きたい、神ではなく普通の国でありたいと願った、選びの民の姿でありました。しかし、自分はぶどうの木であり、実を結ぶために造られています。自分たちが、神に愛され、選ばれ、聖め別たれた民であることから逃れることはできません。

そして、捨てられていた赤ん坊を神が拾い、その子が成長して若い女になり、神が結婚し、そして女王の位にまでなったことも読みました。神がどのようにイスラエルを選ばれたか、その愛と恵みを読みました。ところが、ここでも彼女は其の美しさを使って偶像礼拝をし、さらにエジプトやバビロン等、諸国の男と姦通して、ついにそれらの男たちから見捨てられ、卑しめられたというところを読みました。同じことを話していますね。それから最後には、サマリヤとソドムを見下していたけれども、実はサマリヤはソドムよりも悪くなっていたことを神は明らかにされました。ソドムの罪とは、その男色の前に高慢になっていて、豊かさの中で安逸を貪っていた、貧しい人たちを顧みなかった、ということがあります。

それで 17 章に入ります。17 章そして 19 章には、再び、ぶどうの木としてのユダの姿があります。さらに主は、突っ込みを入れて、その最後の王ゼデキヤに焦点を合わせます。エゼキエルがここで預言を行ったのは、おそらくエルサレム破壊の二年前ぐらい、紀元前 588 年ぐらいではないかと考えられます。主に立ち返ることこそが、神の願っておられることなのに、その目の前に見えることを追っていき、頼れるものに頼っていく最後の王の姿が見えます。

1A 低くされた者の高慢 17

1B 別の鷲に向かう枝 1-10

17:1 次のような主のことばが私にあった。17:2 「人の子よ。イスラエルの家になぞをかけ、たとえを語り、17:3 a 神である主はこう仰せられると言え。

エゼキエルは、これまでと同じように人々の注意を引き寄せるための預言を行ないます。「なぞをかけ、たとえを語り」とありますが、一般の人々でも何か聞きたいかな？と思わせる内容のものです。けれども、その意味するところは聞く耳のある人だけが悟ることができる、あるいはその時に悟ることができなくても、後でその解き明かしを聞いて、悟ることができるという類いのものです。12 節で、「反逆の家」と主が再びユダの民を呼ばれているように、聞くことが鈍くなってしまっているので、敢えて謎や喩えで語られています。

ちょうど、これはイエス様が天の御国の奥義の喩えにおいて、使われた手法です。四つの土の種類の種類まきの喩えから始まり、良い麦と毒麦の喩え、からし種などありましたね。それらを主が語られたのは、「マタイ 13:13 わたしが彼らにたとえで話すのは、彼らは見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、また、悟ることもしないからです。」とあるからです。

17:3 b 大きな翼、長い羽、色とりどりの豊かな羽毛の大鷲が、レバノンに飛んで来て、杉のこずえを取り、17:4 その若枝の先を摘み取り、それを商業の地へ運び、商人の町に置いた。17:5 ついで、その地の種も取って来て、肥えた土地に植え、豊かな水のそばに、柳のように植えた。17:6 それは生長し、たけは低い、よくはびこるぶどうの木となった。その枝は鷲のほうに向き、その根は鷲の下に張り、こうして、ぶどうの木となって、枝を伸ばし、若枝を出した。17:7 さて、もう一羽の大きな翼と豊かな羽毛を持つ大鷲がいた。見よ。このぶどうの木は、潤いを得るために、根を、その鷲のほうに向けて伸ばし、その枝を、自分が植わっている所から、その鷲のほうに伸ばした。

3 節の「大きな翼、長い羽、色とりどりの豊かな羽毛の大鷲」というのは、バビロンのことです。それが「レバノンに飛んで来て、杉のこずえを取り」と言っていますが、これはエホヤキンのことです。エホヤキンは、父エホヤキムが死んだ後にユダの民が王としました。それで、王を「若枝」と呼んでいます。なぜレバノンなのかと言いますと、ソロモンが建てたエルサレムの神殿は、レバノンから運んできた杉の木で造られていたからです。宮殿もレバノンの杉の木です。それで、宮殿は「レバノンの森の宮殿(1列王 7:2)」と呼ばれました。しかし三か月後に、バビロンが捕え移しました。バビロンは、「商業の地へ運び、商人の町」です。黙示録 18 章にも、世界の王と関係を持っている商業の町として出てきます。

ここまでは背景であり5節以降が本題です。「その地の種」というのがゼデキヤです。彼はヨシヤの末の息子として生まれました。バビロンは自分に従属する国として、ユダを生かすことを考えていました。エホヤキンと王族の者たち、また職人たちなど、そういった者たちを摘み取っていただけ

で、ユダとエルサレム自体を滅ぼすことは意図していませんでした。バビロンの支配の中でユダが従うことを願っていました。ですから、再びゼデキヤは、「生長し、たけは低いが、よくはびこるぶどうの木となった」ということでもあります。バビロンの保護の中で、ゼデキヤの支配するユダ国は豊かにされ、強くなっていったのです。しかし、ぶどうの木であります。誰がその豊かさを持ってくるのか？神ご自身です。そして、長けは低いです。なぜか？バビロンの支配の中にいるからです、けれども、そのように低めたのは神ご自身であり、それで神がおられることを知る必要がありました。

ところが 7 節で、「もう一羽の大きな翼と豊かな羽毛を持つ大鷲」がいます。これが、エジプトのパロ、ホフラのことです。豊かなところで、強くされたユダは、独立することを願います。それで、南の国エジプトの助けを借りて、それを行おうと意図するのです。隠れてエジプトと協定を結んだことを知ったバビロンは、その反逆に怒り、それでエルサレムを包囲したのです。

17:8 このぶどうの木は、枝を伸ばし、実を結び、みごとなぶどうの木となるために、水の豊かな良い地に植えつけられていた。17:9 神である主はこう仰せられると言え。それは栄えている。しかし、主はその根を抜き取り、その実を摘み取り、芽のついた若枝をことごとく枯らしてしまわないだろうか。それは枯れる。それを根こそぎ引き抜くのに、大きな力や多くの軍勢を必要としない。17:10 見よ。それが移し植えられたら、栄えるだろうか。東風がそれに吹きつけると、それはすっかり枯れてしまわないだろうか。その芽を出した苗床で、それは枯れてしまう。」

バビロンがエルサレムに生えていたぶどうの木を根こそぎ抜き取る、ということです。バビロンに引き連れて行かれたら、ダビデの世継ぎの王としての力、若枝は、根無し草のようになってしまい枯れてしまいます。「東風」とありますが、イスラエルには西から吹く風と東から吹く風があります。西からの風は地中海からのものなので、湿気を含み、冬に雨をもたらします。東からの風は砂漠からなので大変な熱風であり、「シロッコ」と呼ばれますが、作物をことごとく枯らします。

2B バビロンとの契約 11-21

そして主ご自身による解き明かしが始まります。17:11 次のような主のことばが私にあった。17:12 「さあ、反逆の家に言え。これらがどういうことなのか、あなたがたは知らないのか。言え。見よ。バビロンの王がエルサレムに来て、その王とその首長たちを捕え、バビロンの自分のところへ彼らを連れて行った。17:13 そして彼は王族のひとりを選んで、その者と契約を結び、忠誠を誓わせた。バビロンの王はこの国のおもだった者たちも連れ去っていた。17:14 それは、この王国を低くして、立ち上がれないようにし、その契約を守らせて、仕えさせるためであった。

今、説明したとおりです。王国を低くし、独立しないようにさせ、そしてバビロンとの契約を守らせるためです。

17:15 ところが、彼はバビロンの王に反逆し、使者をエジプトに送り、馬と多くの軍勢を得ようとし

た。そんなことをして彼は成功するだろうか。助かるだろうか。契約を破って罰を免れるだろうか。17:16 わたしは生きている、・・神である主の御告げ。・・彼は、自分を王位につけた王の住む所、彼が誓いをさげすみ、契約を破ったその相手の王の住む所、バビロンで必ず死ぬ。17:17 戦争になって、多くの者を断ち滅ぼそうと、彼が壘を築き塹壕を掘っても、パロは決して大軍勢と大集団で彼をかばわない。17:18 彼は誓いをさげすみ、契約を破った。彼は、誓っていないが、しかも、これらすべての事をしたから、決して罰を免れない。

バビロンとの契約を破ったのであるから、当然の処罰があります。彼はバビロンに捕え移され死にます。そしてエルサレムにはエジプトの援軍は来ません、それでバビロンに滅ぼされます。

17:19 それゆえ、神である主はこう仰せられる。わたしは生きている。彼がさげすんだわたしの誓い、彼が破ったわたしの契約、これを必ず彼の頭上に果たそう。17:20 わたしは彼の上にわたしの網をかけ、彼はわたしのわなにかかる。わたしは彼をバビロンに連れて行き、わたしに逆らった不信の罪についてそこで彼をさばく。17:21 彼の軍隊ののがれた者もみな剣に倒れ、残された者も四方に散らされる。このとき、あなたがたは、主であるわたしが語ったことを知ろう。」

そうです、バビロンとの契約であります、主がここではっきりと、「わたしの誓い、わたしの契約」と言われているのです。ですから、大事なのはバビロンではなく、バビロンを動かしている主の力強い御手なのです。使徒ペテロが言いました。「1ペテロ5:6ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神が、ちょうど良い時に、あなたがたを高くしてください。」今、私たちに都合の悪い状況に置かれているかもしれない。しかし、そこにも主がおられるのだと信じ、受け入れることで、そこから初めて砕かれた自分の魂から、聖霊が実を結ばせてくださいます。

3B 主が植えられる若枝 22-24

17:22 神である主はこう仰せられる。「わたしは、高い杉のこずえを取り、そのうちから、柔らかい若枝の先を摘み取り、わたしはみずからそれを、高くてりっぱな山に植える。17:23 わたしがそれをイスラエルの高い山に植えると、それは枝を伸ばし、実を結び、みごとな杉の木となり、その下にはあらゆる種類の鳥が住みつき、その枝の陰に宿る。17:24 このとき、野のすべての木は、主であるわたしが、高い木を低くし、低い木を高くし、緑の木を枯らし、枯れ木に芽を出させることを知るようになる。主であるわたしが語り、わたしが行なう。」

神がここで語られている「若枝」は、ダビデの子、キリストのことです。この方がユダヤ人の王となることによって、世界の諸国がこの国に付いてきて、それで世界に正義と平和が広がります。キリストによる統治、その神の国が建てられることを神は約束してくださっています。

若枝は、イザヤもエレミヤもメシヤ、キリストの呼び名として預言していました(イザヤ 11:1、エレミヤ 33:15)。主イエスがお育ちになったナザレという村の名前は、ヘブライ語で今でも「ネツェル」

であり、それは「枝」あるいは「若枝」であります。マタイは、「そして、(ヨセフが)ナザレという町に行って住んだ。これは預言者たちを通して、『この方はナザレ人と呼ばれる。』と言われた事が成就するためであった。(2:23)」と言っていますが、それはこのことなのです。そのようなとても卑しいところでキリストは育ち、しかしそれは若枝であり、これから大きな木となって、世界の人々に秩序と平和をもたらします。

ゼデキヤが通った道というのは、国民的にも起こるし、私たち個々人にも起こることです。要は、罪を悔い改めて、主に立ち返ることであるのに、それ以外のところに安心と期待を寄せていくのです。主はただそのことのために、国々を動かし、個々人を動かされています。しかし、人々は自分の安心感と期待を、主ご自身以外のところに向けていくのです。キリスト教会の霊の戦いもここにあります。イエス様のところに行って、イエス様に聞いて、その声に従うということをしなければいけないのですが、イエス様に対面せず、肝心要のところをどこか違うところで得ようとしています。

2A 各自の持つべき負債 18

そこで主は 18 章において、その個々人が主に対して持っている重荷について語られます。神と私たちとの関係の根本的な部分を取り扱う、とても大切な章です。

1B 父の酸いぶどう 1-4

18:1 次のような主のことばが私にあった。18:2 「あなたがたは、イスラエルの地について、『父が酸いぶどうを食べたので、子どもの歯が浮く。』という、このことわざをくり返し言っているが、いったいどうしたことか。18:3 わたしは誓って言う。…神である主の御告げ。…あなたがたはこのことわざを、イスラエルで、もう決して用いないようになる。18:4 見よ、すべてのいのちはわたしのもの。父のいのちも、子のいのちもわたしのもの。罪を犯した者は、その者が死ぬ。

イスラエル人の中で、今、起こっていることを他人事のようにして話していた時に使っていたのが、「父が酸いぶどうを食べたので、子どもの歯が浮く。」というものです。先祖が罪を犯していたから、だから今、バビロンがエルサレムを包囲しているのだ、という考えです。しかし、決してそうではありません。主はこれから、私たちにご自身に立ち返ることを説かれていきます。

確かに、先祖の犯した罪の影響は大きいです。主はモーセにも、「出エジプト 34:7 恵みを千代も保ち、咎とそむきと罪を赦す者、罰すべき者は必ず罰して報いる者。父の咎は子に、子の子に、三代に、四代に。」と言われました。しかし、それは自動的にその罪の呪いの中にある、ということではないのです。いつでも、その鎖はいつでも断ち切ることができます。かつてマナセ王が、ユダの国に広めた反宗教改革、父ヒゼキヤの宗教改革を全て覆して、周囲の異邦人よりもさらにひどい偶像礼拝を忌み嫌うべきことを行ないました。それをもって主は、必ず裁くことを宣言されました。けれども、それでもヨシヤが出て来た時は、主はその裁きを引き延ばされました。いや、引き伸ばしたのではなく、もしユダの民が主に立ち返るのであれば、いつでもその裁きの手は引かれる、と

ということです。しかし、彼らの心の深いところを知っておられる神はそのことを前もって語られた、ということです。

ですから本質的なところでは、主は各人が行なっていることに対して報いを与えられます。「罪を犯した者は、その者が死ぬ。」と主は言われます。私たち人間は、死ぬべき罪を犯したという事実を認めないといけないのです。それを、自分が環境や状況の一部になっていると言って、主に向き合うこと、主の前に行くことを拒みます。「親がこうだから、私はこうなっているのだ。」と言って、罪があることを認めません。ある人は、知識を蓄えて弁解をします。イエス様はユダヤ人指導者に、言われました。「ヨハネ 5:39-40 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。」そしてある人は、感情にしがみついて弁解します。「こう感じてしまうのだから、仕方がない。」ということです。もちろん、感情や過去の経験というのは大きな力を持っています。しかし、そのしがらみをも打ち砕く力を、この方を主としていく者たちには御霊によって与られるのです。それが福音なのです。だから勇気をもって、主のところに行かないといけないのです。

2B 各世代の報い 5-18

18:5 もし、正しい者なら、その人は公義と正義とを行ない、18:6 丘の上で食事をせず、イスラエルの家の偶像を仰ぎ見ず、隣人の妻を汚さず、さわりのある女に近寄らず、18:7 だれをもしいたげず、質物を返し、物をかすめず、飢えている者に自分の食物を与え、裸の者に着物を着せ、18:8 利息をつけて貸さず、高利を取らず、不正から手を引き、人と人との間を正しくさばき、18:9 わたしのおきてに従って歩み、まことをもってわたしの定めを守り行なおう。こういう人が正しい人で、必ず生きる。…神である主の御告げ。…

モーセの律法に定められている公義や正義の事柄であります。初めに偶像礼拝です。次に不品行です。律法にはここにあるように、具体的に性的純潔を守るための道を主は教えておられます。そして貧しい者への慈善です。それから正しい裁きや物差しを使うということです。

18:10 しかし、彼が子を生み、その子が無法の者で、人の血を流し、先に述べたことの一つさえ行なわず、18:11 これらのことをしようともせず、かえって丘の上で食事をし、隣人の妻を汚し、18:12 乏しい者や貧しい者をしいたげ、物をかすめ、質物を返さず、偶像を仰ぎ見て、忌みきらうべきことをし、18:13 利息をつけて貸し、高利を取るなら、こういう者ははたして生きるだろうか。彼は生きられない。自分がこれらすべての忌みきらうべきことをしたのだから、彼は必ず死に、その血の責任は彼自身に帰する。

父が正しければ、子が正しいのではないという極端な例です。けれども、この極端が現実の中でしばしば起こります。先ほど言及した極悪王マナセの父が誰であったかを思い出してください。そう

です、ヒゼキヤです。ヒゼキヤの宗教改革の後に、マナセが逆・宗教改革を行ないました。イエス様の時代のユダヤ人指導者は、「わたしたちの父はアブラハムです。」と言いました。けれども、イエス様は言われました。「あなたがたがアブラハムの子どもなら、アブラハムのわざを行ないなさい。ところが今あなたがたは、神から聞いた真理をあなたがたに話しているこのわたしを、殺そうとしています。アブラハムはそのようなことはしなかったのです。(ヨハネ 8:39-40)」アブラハムは正しい人でしたが、正しい人を先祖に持っているとして自負して、それで自分を正しいとしていながら、自分たちはイエス様を殺したいぐらい憎んでいたのです。

ですから、キリスト者の親を持っている人が、その親の影響があるから自分を正しいとすることは決してできません。また自分の周りで正しい行いをしているキリスト者がいるから、自分を正しいとすることはできないのです。

18:14 しかし、彼が子を生み、その子が父の行なったすべての罪を見て反省し、そのようなことを行なわず、18:15 丘の上で食事をせず、イスラエルの家の偶像を仰ぎ見ず、隣人の妻を汚さず、18:16 だれをもしいたげず、質物をとどめておかず、物をかすめず、飢えている者に自分の食物を与え、裸の者に着物を着せ、18:17 卑しいことから手を引き、利息や高利を取らず、わたしの定めを行ない、わたしのおきてに従って歩むなら、こういう者は自分の父の咎のために死ぬことはなく、必ず生きる。18:18 彼の父は、しいたげを行ない、兄弟の物をかすめ、良くないことを自分の民の中で行なったので、彼は確かに自分の咎のために死ぬ。

これが、福音です。親がどんなに悪いことをしていて、自分がそれをずっと見て育ったとしても、それでもそれを悲しみ、反省し、これらのことから離れることができるのです。その典型例が、ヨシヤであります。マナセの後にアモンがいて、彼も主の前に悪を行ないました。そしてヨシヤが生まれました。彼は律法の書を読んで、自分の衣を裂きました。女預言者フルダが、ヨシヤについてこう言っています。「2列王 22:19 あなたが、この場所とその住民について、これは恐怖となり、のろいとなると、わたしが言ったのを聞いたとき、あなたは心を痛め、主の前にへりくだり、自分の衣を裂き、わたしの前で泣いたので、わたしもまた、あなたの願いを聞き入れる。」主が受け入れられるのは、この砕かれた心です。主の言葉によって、心を痛めます。そして主の前でへりくだります。そして主の前で泣きます。この態度こそ、主が願っておられることです。主は自分を低める者を高められるのです。

これは希望です。私たちは、あまりにも悪い環境にいた人々が、「もうだめだ。これだと、どうやってその人が立ち直れるのだろうか。」と誤ってしまいます。しかし午前礼拝で話しましたが、進藤龍也牧師は、少年の頃、父が浮気してふらふら歩いて仕事をしなかったので、母がスナックで夜働いていたそうです。とても寂しい環境でした。それで暴力団に入り、覚醒剤に手を染めました。けれども、恵みは後の者を先にします。そのためには、真正面から主の向き合うことが必要なのです。

3B 今の態度 19-32

18:19 あなたがたは、『なぜ、その子は父の咎の罰を負わなくてよいのか。』と言う。その子は、公義と正義とを行ない、わたしのすべてのおきてを守り行なったので、必ず生きる。18:20 罪を犯した者は、その者が死に、子は父の咎について負いめがなく、父も子の咎について負いめがない。正しい者の義はその者に帰し、悪者の悪はその者に帰する。

主は続けて、福音、良き知らせを語っておられます。神の恵みは、家庭環境やその他、自分が置かれている状況や、素性、そうしたものの付きまとう呪いから解放します。自分の置かれていた環境や、自分の属しているもの、団体もあれば、民族や、国もあるでしょう、そうしたものの運命を背負わなければいけないと思っけていても、いいえ、主は貴方自身を見てくださいます。教会に来て、何がすごいかと言いますと、そこに差別がないということです。受け入れる、ということです。それはイエス様が受け入れられるからです。

18:21 しかし、悪者でも、自分の犯したすべての罪から立ち返り、わたしのすべてのおきてを守り、公義と正義を行なうなら、彼は必ず生きて、死ぬことはない。18:22 彼が犯したすべてのそむきの罪は覚えられることはなく、彼が行なった正しいことのために、彼は生きる。18:23 わたしは悪者の死を喜ぶだろうか。…神である主の御告げ。…彼がその態度を悔い改めて、生きることを喜ばないだろうか。18:24 しかし、正しい人が、正しい行ないから遠ざかり、不正をし、悪者がするようなあらゆる忌みきらうべきことをするなら、彼は生きられるだろうか。彼が行なったどの正しいことも覚えられず、彼の不信の逆らいと、犯した罪のために、死ななければならない。

午前礼拝でお話しましたが、もう一度、言います。主が気にしておられるのは、「今のあなた」です。そして「今のあなたの姿勢、態度」であります。それだけです。過去にどんなに悪いことをしていたとしても、今、その一切切を悔いていて、へりくだって、主の前に出てきているのであれば、その罪は全て赦され、まるで罪を犯したことがないかのようにみなしてください。

そして、過去にどんなに正しいことをしていたとしても、今、そうでないのであれば、全く意味がありません。「あの人は、前にイエス様を信じて告白しました。」と言っても、今、イエス様を信じているように全く見えないのであれば、その人はその信仰告白によって救われることはないのです。「では、救いは失うということなのですか？」と聞く人がいるかもしれませんが、私にはわかりません。救いを失うのか、元々、救われていなかったのか分かりませんが、今、信じているように生きていないのであれば、悔い改めない限り、神の国に入ることはできないのです。「あなたがたは、正しくない者は神の国を相続できないことを、知らないのですか。だまされてはいけません。(1コリント6:9)」と使徒パウロは言いました。

18:25 あなたがたは、『主の態度は公正でない。』と言っている。さあ、聞け。イスラエルの家よ。わたしの態度は公正でないのか。公正でないのはあなたがたの態度ではないのか。18:26 正し

い人が自分の正しい行ないから遠ざかり、不正をし、そのために死ぬなら、彼は自分の行なった不正によって死ぬ。18:27 しかし、悪者でも、自分がしている悪事をやめ、公義と正義とを行なうなら、彼は自分のいのちを生かす。18:28 彼は反省して、自分のすべてのそむきの罪を悔い改めたのだから、彼は必ず生き、死ぬことはない。

神が全ての罪を悔い改める者に赦し、そして悔い改めない者は罰するということについて、「それは公正ではない」という反応をします。人のせいにするだけでなく、神にも非難の矛先を向けるのです。神の取り扱いについて、必ず、「神がいるのであれば、なぜこんなことを許されるのか。」と言います。しかし、神は徹底して公正であります。そうではなく、神はそれぞれの者たちに対して、あらゆることを通して、へりくだるように導かれます。その声を聞くことが必要なのです。そこで、「なぜ主がこんなことを許すのか」という問いかけをしていたら、せっかく与えてくださっている神の語りかけを、聞き損じてしまうのです。

18:29 それでも、イスラエルの家は、『主の態度は公正でない。』と言う。イスラエルの家よ。わたしの態度は公正でないのか。公正でないのはあなたがたの態度ではないのか。18:30 それゆえ、イスラエルの家よ、わたしはあなたがたをそれぞれその態度にしたがってさばく。…神である主の御告げ。…悔い改めて、あなたがたのすべてのそむきの罪を振り捨てよ。不義に引き込まれることがないようにせよ。

私たちに必要なのは、正しい態度です。いろいろなことが起こって試練を受けていても、そのことによって主が何かを語っておられます。それを聞き逃さないことです。その中で引きこまれて、それで心を主から引き離してしまうような不義の中に陥らないことです。心に妬みが起こる、怒りが起こる、そういったものから離れることです。

18:31 あなたがたの犯したすべてのそむきの罪をあなたがたの中から放り出せ。こうして、新しい心と新しい霊を得よ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。18:32 わたしは、だれが死ぬのも喜ばないからだ。…神である主の御告げ。…だから、悔い改めて、生きよ。

ここが大事です。主のところに出ていく勇気を持つことを見ていきましたが、主はそのような者たちに、「新しい心と新しい霊」を与えてくださいます。ですから、午前礼拝でも話しましたが、ザアカイは大きく行ないを改めることができたのです。彼は、イエス様が自分の家に来られるということで、そのイエス様によって心が変わられたのです。それで、貧しい人に施し、だまし取った物は四倍にして返すことができました。新しい霊が注がれて、新しい心に変えられたのです。主の聖霊は、私たちの悔い改めと共に働いてくださいます。私たちが主を受け入れる時に、心をしっかりと定めて、正しいことをすることができるようになります。そして主の御心は、一人として滅びることなく、悔い改めに導かれることであります。

3A 諸国に取られる哀歌 19

ここまで主が語られましたが、主は現実に戻られます。王ゼデキヤは、悔い改めません。前例の王たちがいるのに、彼らの行ないが悪く、それで諸国に捕え移されたのに、目を覚ますことができませんでした。そこで哀歌をエゼキエルに与えられます。ダビデの王座が死んでしまったことに対する、哀悼の歌です。

1B 二頭の若獅子 1-9

19:1 あなたはイスラエルの君主たちのために哀歌を唱えて、19:2 言え。あなたの母である雌獅子は何なのか。雄獅子の間に伏し、若い獅子の間で子獅子を養った。19:3 雌獅子が子獅子のうちの一头を育て上げると、それは若い獅子となり、獲物を引き裂くことを習い、人を食べた。19:4 諸国の民はその獅子のうわさを聞いた。その獅子は彼らの落とし穴で捕えられた。彼らは鉤でこれをエジプトの地へ引きずって行った。

これは、ヨシヤの死後の王、エホアハズのことです。母というのは、エルサレムのことです。エルサレムは、「雄獅子」「若い獅子」つまり、周りの諸国の王たちのことです。ダビデの王座の継承者としてエホアハズは、主の前に悪を行ないました。なぜか？その周囲の獅子たち、王たちと同じように振る舞ったからです。

ダビデの王座に着く者は、神に選ばれ、聖め別たれた国の王であり、キリストの使命を帯びているのです。それなのに、他の王たちと同じように横暴に振る舞いました。イエス様が、弟子たちに言われました。「ルカ 22:25-26 異邦人の王たちは人々を支配し、また人々の上に権威を持つ者は守護者と呼ばれています。だが、あなたがたは、それではいけません。あなたがたの間で一番偉い人は一番年の若い者のようになりなさい。また、治める人は仕える人のようでありなさい。」私たちはイエス様の愛を知っています。そして、その血によって罪から解放されています。それゆえ、その愛によって聖め別たれたのですから、祭司のように神に仕え、そして人々に仕えるのです(黙示 1:5-6)。

19:5 雌獅子は、待ちくたびれ、自分の望みが消えうせたことを知ったとき、子獅子のうちのほかの一头を取り、若い獅子とした。19:6 これも、雄獅子の間を歩き回り、若い獅子となって、獲物を引き裂くことを習い、人を食べた。19:7 この獅子は人のやもめたちを犯し、町々を廃墟とした。そのほえる声のために、地と、それに満ちているものはおののいた。19:8 そこで、諸国の民は、回りの州から攻め上り、その獅子に彼らの網を打ちかけた。その獅子は彼らの落とし穴で捕えられた。19:9 彼らはそれを鉤にかけておりに入れ、バビロンの王のもとに引いて行った。彼らはそれをとりでに閉じ込め、二度とその声がイスラエルの山々に聞こえないようにした。

これは、エホヤキンのことです。先のエホアハズは、ユダが決めた王であり、それをエジプトのパロ、ネコが取り除き、その代わりにヨシヤの他の息子、エホヤキムを立てました。そしてエホヤキ

ムが王である時に、世界情勢が変わり、エジプトの支配力が衰え、バビロンが力を持ちました。エホヤキムはバビロンの勢力下に置かれました。そして彼も死にます。それから、エルサレムはエホヤキムの息子エホヤキンを立てます。しかし、彼の治世も三か月と短く、ここに書かれているようにバビロンに捕え移されました。6節に「待ちくたびれ、自分の望みが消えうせた」とありますが、それは自分たちの立てた王エホアハズが、エジプトから戻って来るのではないかと期待していたからです(エレミヤ 22:10-12)。しかし、彼は二度と帰ってきませんでした。同じようにエホヤキンも、バビロンから帰って来ることはありませんでした。

2B 無くなった若枝 10-14

そして最後の王ゼデキヤに対する言葉です。まだ彼がダビデの王座に着いている時に既に、哀歌を歌われています。死ぬ前に哀悼されるとは、なんとも皮肉です。

19:10 あなたの母は、まさしく、水のほとりに植えられたぶどうの木のようにだった。水が豊かなために実りが良く、枝も茂った。19:11 その強い枝は王の杖となり、そのたけは茂みの中できわだって高く、多くの小枝をつけてきわだって見えた。19:12 しかし、それは憤りのうちに引き抜かれ、地に投げ捨てられ、東風はその実を枯らし、その強い枝も折られて枯れ、火に焼き尽くされた。19:13 今や、それは、荒野と砂漠と、潤いのない地に移し植えられ、19:14 火がその枝から出て、その若枝と実を焼き尽くした。もう、それには王の杖となる強い枝がなくなった。」これは悲しみの歌、哀歌となった。

ゼデキヤに対して、主は最後のチャンス、機会を与えていました。17章にあるように、彼は、「水のほとりに植えられたぶどうの木」であったのです。バビロンはユダとその都エルサレムを滅ぼす意図はなかったのです、ただ従ってさえいてくれれば。そして主は、そのようにへりくだらせた中で、主の選ばれたエルサレムにおいて、主ご自身の命によって育ち、豊かになるようにされたのです。私たちがへりくだる時に、主がぶどうの木となってくださり、私たちも枝から多くの実を結ぶことができます。けれども、ここで際立ってきたとあります。そう、強くなってきたら彼は高慢になったのです。それが、17章で見た通りです。エジプトに目を向け、それでバビロンから独立しようとしてしました。

それで彼は引き抜かれました。バビロンというところでは、既に主による潤いがありません。そこでさらに火で焼き尽くされています。これは、「王の杖となる強い枝」つまり、世継ぎの子が永遠の国を治めると神が約束された、ダビデの王座です。ユダに王がいなくなったと哀しんでおられます。

人は、主によって、主に立ち返る機会が与えられています。しかし人は、主なる神ご自身ではなく、何か他のものに頼り、他のもののせいによって生きています。私たちの目を曇らせているものを取り除くのは、私たちが主ご自身を見つめる勇気を持たねばなりません。他の人のせい、他のもののせいにするのではなく、いつも何か頼るものを見つけて探すのではなく、主の前に出ることです。そうすれば、主が必ず罪という重荷を取り除いてくださり、安息を与えられます。